

日常場面における被共感経験の体験的側面の検討

古野弘三

(広島大学大学院人間社会科学研究科)

問題

他者に共感されること（被共感）に関する先行研究の中には、尺度を用いた研究がある。例えば Mercer et al. (2004) は医者への共感を患者の視点から評定する尺度（Consultation and Relational Empathy measure: CARE measure）を開発した。CAREは医者—患者間のみならずセラピスト—クライアント間の共感を検討するためにも使用されている（e.g., Vitinius et al., 2018）。尺度の利用は被共感の有無や程度を明らかにすることや、他の変数との関連性の検討を可能にする。一方で、被共感という経験自体がどのようなものなのかまでは明らかにすることができない。これまでの先行研究には質的な方法を用いて被共感について詳細に検討したものも存在する（e.g., Bachelor, 1988; Wynn & Wynn, 2006）。しかしこれらの研究においても、被共感者の経験それ自体を描き出すことは行われていない。そこで本研究では、日常場面における被共感経験の体験的・主観的な側面を探索的に検討することを目的とする。

方法

参加者 日本語を母語とする広島大学の学部生7名が調査に参加した。

データ収集 非構造化面接により行った。面接では被共感経験の相手、被共感経験の時期、参加者自身の被共感経験の詳細を尋ねた。参加者からの語りを得た後、経験の詳細を明らかにするために幾つかの質問を行った。面接の終了後には話し残したことがないかの確認を行い、参加者がそのエピソードに関して話すことができる全ての情報が得られるようにした。なお、調査への参加及びデータの収集・利用に関して、面接実施前に参加者に説明を行い、書面での同意を得た。

データ分析 録音データの逐語録を作成した上で、データの分析は Giorgi (2009 吉田訳 2013) の現象学的方法に従った。分析は「1. 全体の意味を求めて読む」「2. 意味単位の決定」「3. 参加者の自然的態度の表現の、現象学的心理学的に感受性のある表現への変換」を通して行われ、被共感経験の構造が見出された。

結果

2つの被共感経験の構造が見出され、1つ目をタイプⅠ、2つ目をタイプⅡとした。タイプⅠは、被共感者が自身の悩みや価値観などを理解・受容してくれる他者がいないと感じている状況で、そのような他者と出会うことによって、安心感や気が楽になる感じを得る経験だった。タイプⅡは、被共感者が既にコミュニケーションの相手を自身の悩みや価値観などを理解・受容してくれる存在だと感じている状況で、相手に理解や受容を示されるが、特段の反応や変化を生じない経験だった。

考察

タイプⅠの被共感経験では「理解・受容されている」「仲間がいた」「安心」といった感覚が生じていた。共感されることで生じたこうした感覚は、それ自体が被共感者本人にとってポジティブな体験となっているという意味で重要である。またこれらの感覚には「居場所」の心理的機能の因子（杉本・庄司, 2006）との類似性や、自助グループでの体験（e.g., 聞, 2005）との類似性が見られる。このことから、共感されることが「居場所」の形成や自助グループでの体験を支えている可能性が考えられる。

タイプⅡの被共感経験について、相手に理解や受容を示されたにも関わらず、被共感者が特段の反応や変化を示さなかったことが注目になる。これは、共感者の共感的応答が必ずしも被共感者の被共感経験に繋がるとは限らないことを示している。このような経験となった理由として、本研究からは、コミュニケーションの相手が既に自身を理解・受容してくれる存在として認識されていたことが考えられる。今後は共感的応答に対して被共感経験が生起する場合としない場合の違いについてより詳細に検討することで、被共感経験についての理解を深めることができると考えられる。

謝辞

本研究の遂行にあたり、貴重なご助言をいただきました広島大学大学院人間社会科学研究科の安部主晃准教授に、心から感謝を申し上げます。